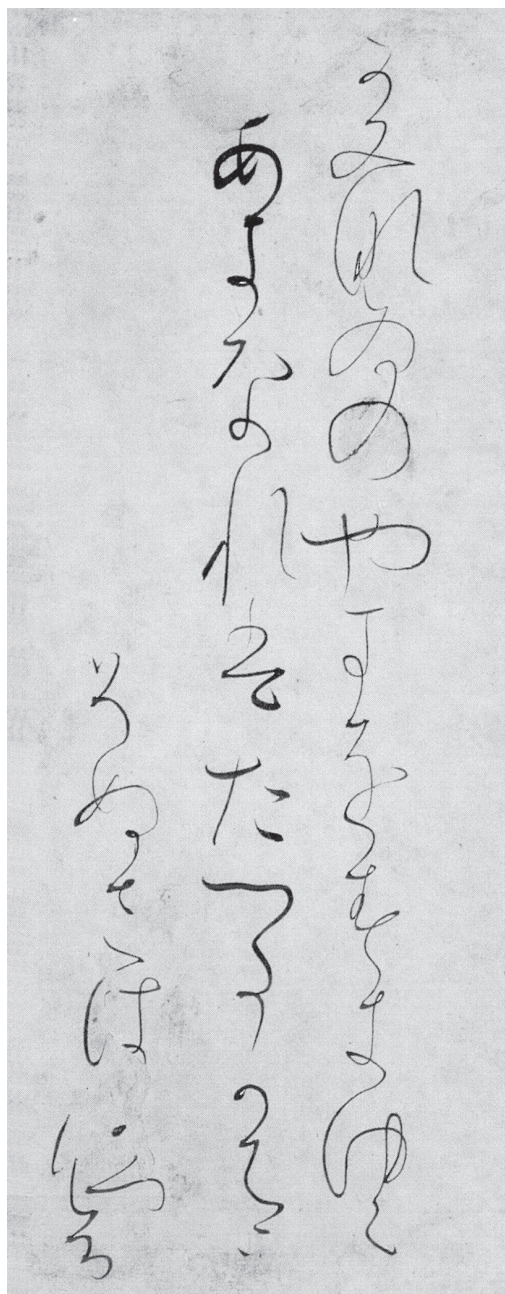


升色紙

昇試随意参考として次の三行を半切に臨書する。

(二玄社)



『可^かみ那^なのや万^まを春^す支^ぎゆくあ支^きなれ盤^{ばん}たつ多^た可^か者^は一^に曾^ぞぬさは可^かづ介^ける』

一字書 (三月二十二日締切)

課題

懷

- (1) 書体自由
- (2) 半紙タテ ※ヨコは中止
- (3) 落款は余白に調和を工夫し書き入れる
- (4) 出品料 四四〇円
- (5) バーコード券貼付 太枠内の臨昇の隣の空欄に
一字と記入 段級は無記入

半切に収める構成は、自分で考えること。

「〇〇臨」の位置も自分で考えること。

欠損箇所は活字を確認し、各自で補い書き込むこと。

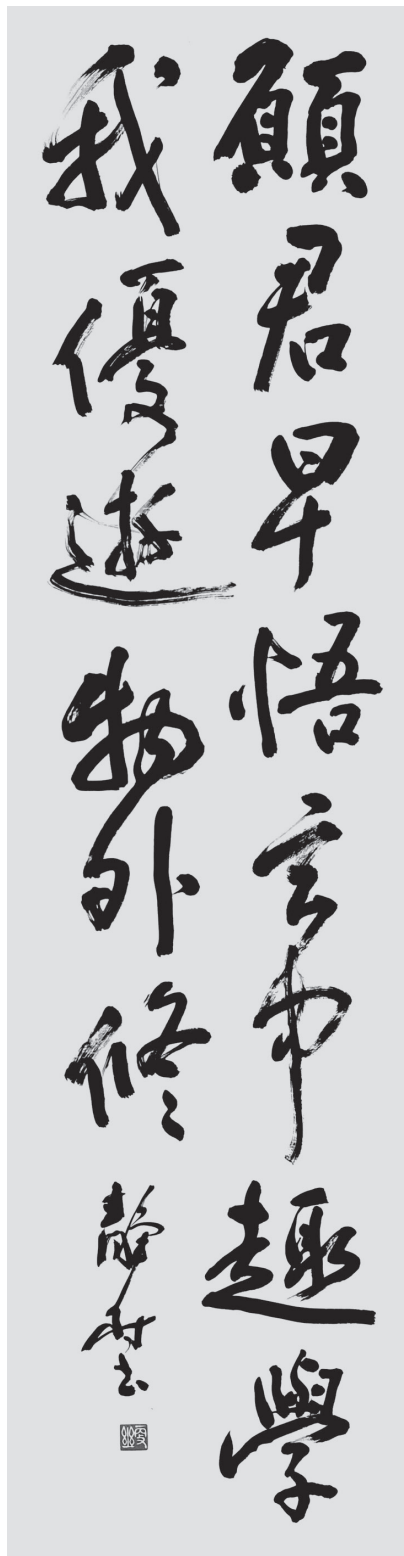
※随意部半紙参考としてもご活用下さい。抜粋可。

昇試第一部漢字課題

(三月二十二日締切)

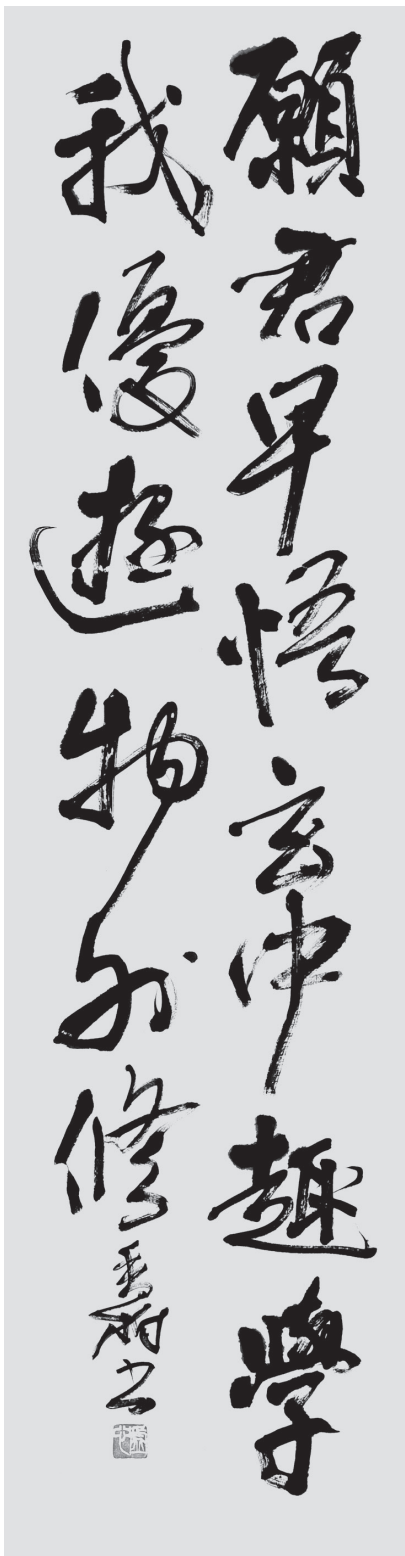
A
鈴木静村先生書

願君早悟玄中趣 學我優遊物外修 (無名人)
願くは君早く悟れ玄中の趣、我は学ぶ優遊物外の修。



B
高橋香樹会長書

願 この形は古典に多い。君 二画目は右へ突き出してもよい。玄 “三”ではない。“玄”を意識。趣 “取”末筆は長すぎた。短く。我一画目と二画目を離してゆとり。優 旁は崩しすぎ、行書体を字典で確認のこと。物からの連綿線は太過ぎたか。細めにスッキリと。



今回も草書でと思い、書き始めたが、だんだん行書に変えてゆき、最終的に半々になってしまった。草書だけで書くのは難しいと改めて感じました。連綿線を使わずに、流れをと、縦画を左右に動かしてみた。また、筆線の強弱に意を用いた。特に、「願」に苦勞した。墨継ぎは「趣」と「物」。

訳：君に願うは外でもない老荘の学問の奥義を悟ることであるが、我もまた世俗を離れ超然としてのどかに暮らすことを学ぼう。

予告 (四月二十二日締切)

雨過芳花潤

風來綠葉柔

研朱讀周易

更覺小牕幽 (錢鳳綸)

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

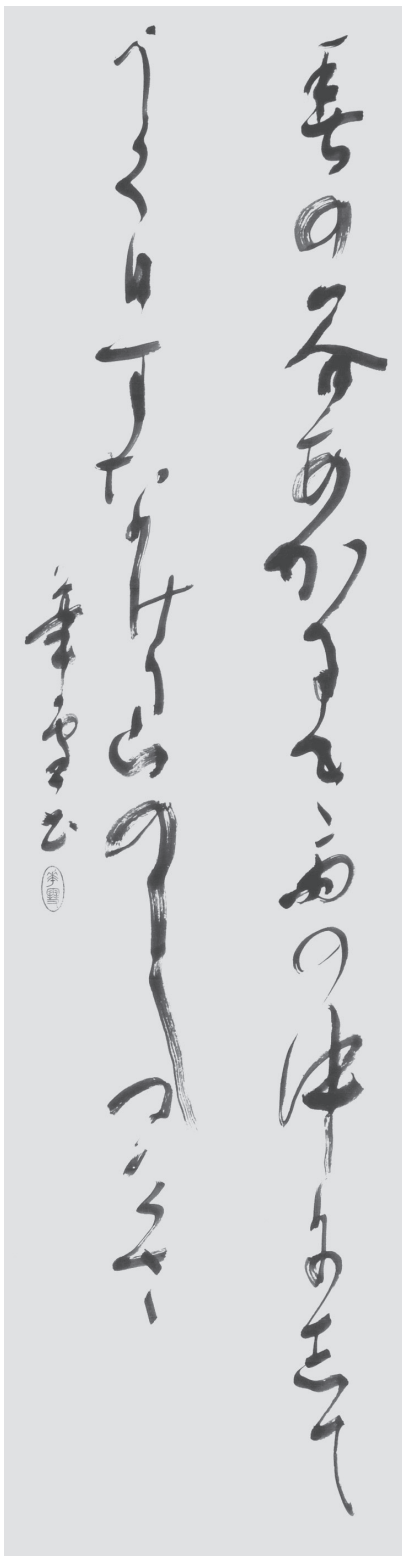
昇試第一部かな課題

(三月二十二日締切)

A

平岡華雪先生書

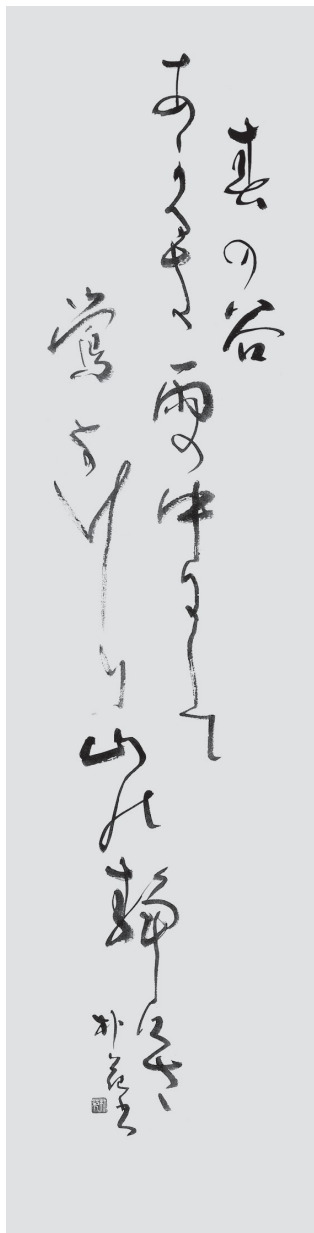
春の谷あかるき雨の中にして鶯なけり山の静けさ(尾上柴舟)
春の谷あかるき雨の中にして久日すなけり山のしつけ介さ



B

向山朴花先生書

春の谷あ可る支雨の中に尔して鶯な計り山能静のしづ介さ



学び方

歌意：春の谷あいに明るい雨が降り続く中、うぐいすが鳴いている。この山の何と静かなことよ。
近代歌です。三行書きにして、本歌通りの漢字を使い、加えて末尾の「しづけさ」の仮名書きは、作品にするといかにも引き締まらず、「静けさ」にしました。その為文字数が少なく、全体に文字表現が大きい感じですが、以前にもお話ししましたが、現代に近い歌の場合、言葉の持つ意味(表意文字)を自然体で判読しやすい表出に心がけています。この作品も、いくつか同じ仮名文字、助詞、助動詞などに不自然な線を期待して、変体仮名を使いました。
古典の和歌などを書く時、先ず歌の内容を理解することには始まり、変体仮名(表音文字)を使って生み出す優美な線質をめざして磨いていきましょう。

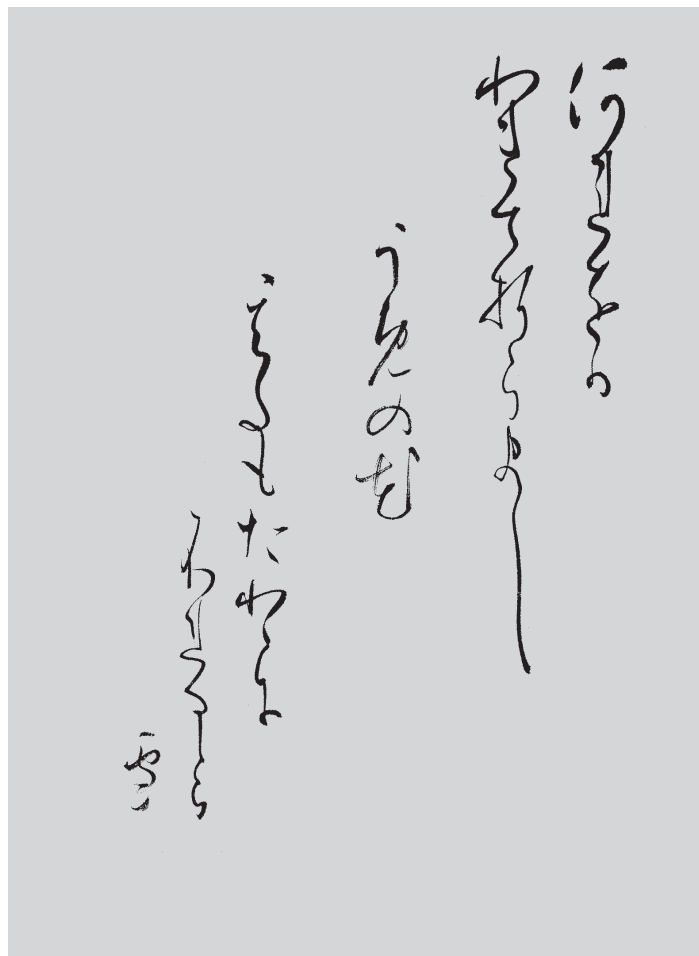
尾上柴舟の歌
明治から昭和にかけての詩人、歌人、書家、国文学者、文学博士。牧水、夕暮などは、柴舟の流れを汲む。又、優美な仮名文字の書家としても名高い。
「春の谷に鳴く鶯」というモチーフは、万葉集、古今集にも見られる伝統的なもの。歌い出しに、詩情を決定づけて、場面を素直に描き出している歌である。

予告 (四月二十二日締切)

道のべに清水ながる、柳かげしばしとてこそ立ちとまりつれ(新古今和歌集 西行法師)

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

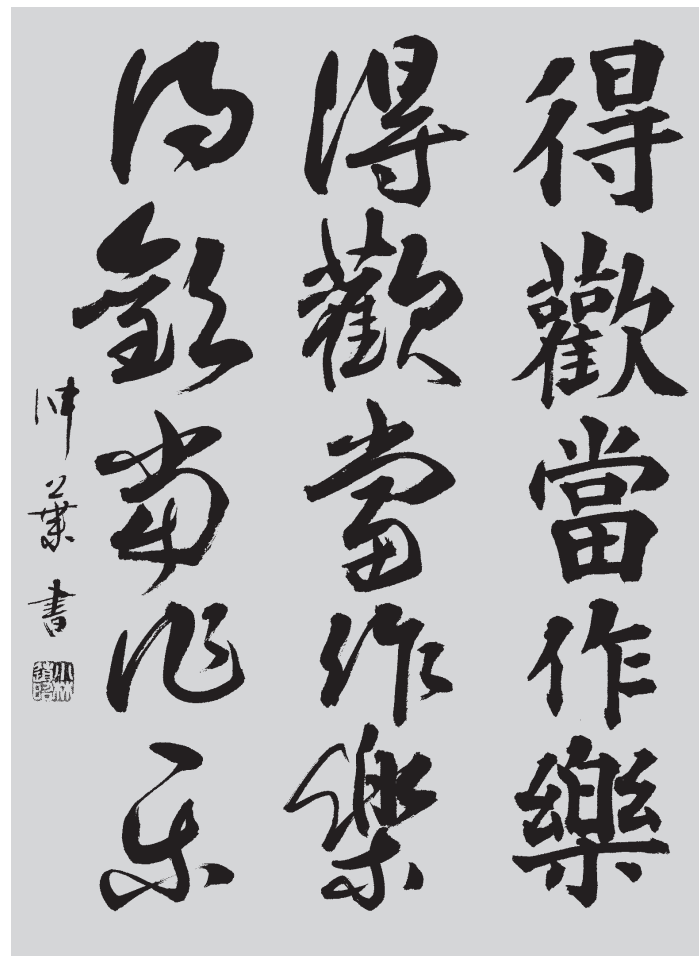
昇試第二部かな課題 (三月二十二日締切)



高塚竹堂先生書

何れをかわきて折らましうめの花えだもたわにふれる白雪 (凡河内躬恒)
何連をかわきて折らましう免の花え多もたわにふれ連るしら雪

昇試第二部漢字課題 (三月二十二日締切)



小林伸葉先生書

得歡當作樂 (陶淵明)

欲を得ては当に樂しみを作すべし

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

昇試第三部かな課題 (三月二十二日締切)

昇試第三部漢字課題 (三月二十二日締切)

平岡華雪先生書

江山花柳に満つ (劉因)

訳：春が山にも川にも訪れ花や柳が満ちわたる。

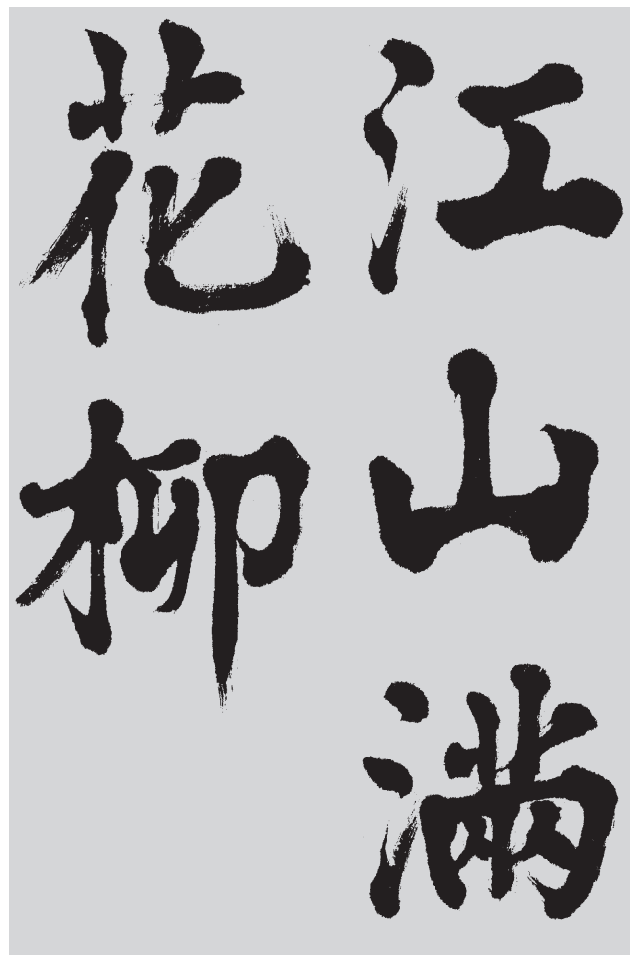
〈満・「柳」について〉

下図の書き方でもよい。

古典に多く見られる。

「柳」の最終画スッキリと。

満柳



(4月22日締切)

和光同塵 (老子)

平岡華雪先生書

挿木の芽今朝はひそかに葉をなせり

(臼田登代子)

挿木の芽介さは日そ可尔葉をなせり

〈変体仮名の習熟を〉

二行目には変体仮名四文字 (介・日・可・尔) を含む。連綿に弾みをつけ、流れを大切に重ねて練習を。

挿木の芽
ふかれつゝ柳の糸のそろひけり

葉をなせり
ふかれつゝ柳の糸のそろひけり

(4月22日締切)

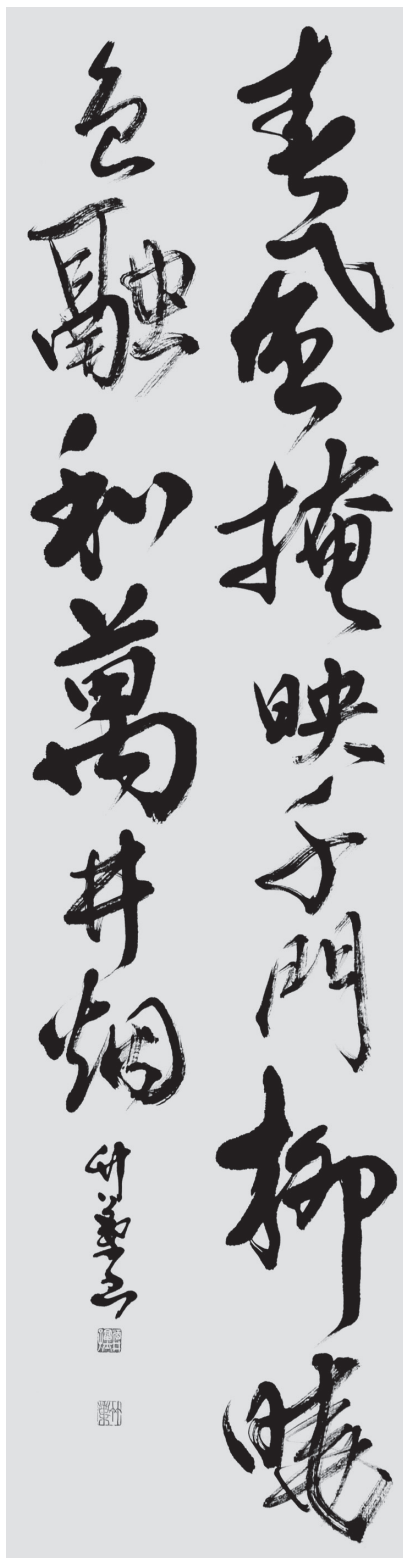
ふかれつゝ柳の糸のそろひけり (きみ子)

◆注 意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

昇 試 随 意 参 考

酒井竹葉先生書

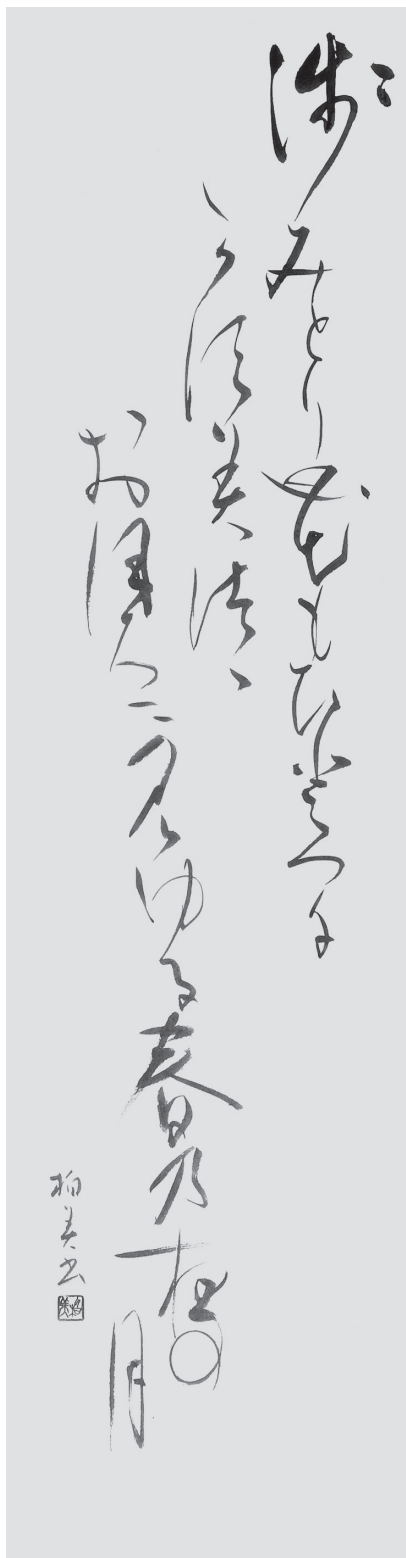
春風掩映千門柳 曉色融和萬井烟 (李郢)
しんふうえんえい せんもん やなぎ ぎょうしよくゆうわ ばんせい けわり
 春風掩映す千門の柳、曉色融和す万井の烟。



訳：春風吹きて多くの家の柳は緑色あい映じ、夜明けの景色は和らいで多くの家に炊烟が起こる。

石島柏美先生書

浅みどり花もひとつに霞みつつおぼろに見ゆる春の夜の月 (菅原孝標女)
あさ みどり はな もひとつに かすみ つつ おぼろに みゆる はる の 夜の 月
 浅みどり花もひ登つる可須美徒々お保ろ二見ゆる春乃夜の月

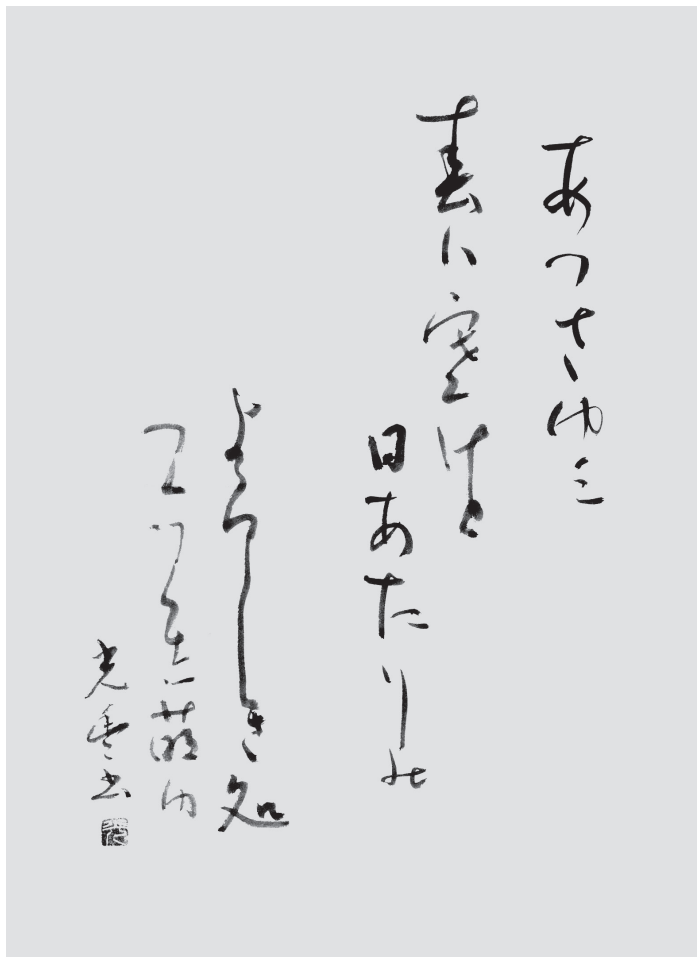


訳：薄い緑色の空に、桜の花も一つになって、区別もなく霞み霞みしていて、おぼろに見える、春の夜の月よ。

◆注 意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

昇 試 随 意 参 考

訳：春はまだ寒いけれど、日あたりのよいところには、はやくも土筆が可愛らしい頭をのぞかせはじめた。



※あづさゆみ…「春」にかかる枕詞。

絹村光豊先生書

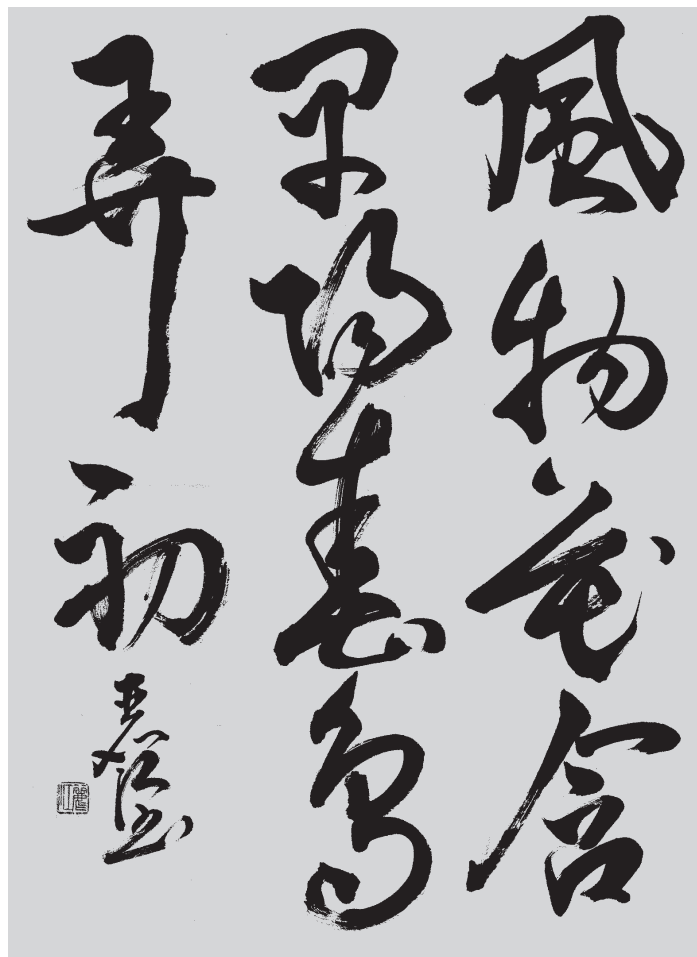
訳：景色は花が咲きかかるとが早く、春来しのために鳥は今鳴くのである。

あづさゆみ春は寒けれど日あたりのよろしき処につくづくし萌芽
あつさゆみ三春八寒けと日あたり能よろしき処につくつくし萌芽 (斎藤茂吉)

昇 試 随 意 参 考

吉岡麗江先生書

風物花含早 陽春鳥弄初 (方元煥)
風物花含む早く、陽春鳥弄する初。



◆注 意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

硬筆部課題参考

(三月二十二日締切)

赤木典子先生書

石原春香先生書

課題2 (初段格以下)

課題1 (初段以上)

叙情は感傷ではない。甘さでもない。
人間の生命力の豊かさの歌にほかならないのである。

夢うつつの中に眼の前に野広い海辺
の緑の沙地が展開して来た。上には
深藍色の天空に掛るまんまろの月が
黄金色であった。

課題1 (初段以上)

夢うつつの中に眼の前に野広い海辺
の緑の沙地が展開して来た。上には
深藍色の天空に掛るまんまろの月が
黄金色であった。

『故郷』 魯迅

◆注意

- (1) 自分の段級に合った課題を選択。
- (2) ペンまたはボールペン(黒色)を使用のこと。青インクは不可。
- (3) 段級欄は本人が記入(色は黒)はじめて出品される方は私製の紙(3×4 cm位に)次の4項目を記入して作品左下隅に貼って出品して下さい。①硬筆部②支部名または都道府県名③氏名または雅号④新
- (5) 会員は無料・会員外は四六〇円

課題2 (初段格以下)

叙情は感傷ではない。甘さでもない。
人間の生命力の豊かさの歌にほかならないのである。

(池田満寿夫)